

十七世紀の初め、マテオ・リッチの『坤輿万国全図』、ジョリオ・アレニの『職方外紀』などによって「印弟亜」・「莫臥爾」の二つの「インド」の存在が知られていたが、『職方外紀』の印弟亜の箇所では、仏教に対する無知から、ヒンドゥー教と混同され「奉仏」という記述が見られていた。しかし、シドゥッティに取材した新井白石の『采覧異言』（正徳三年）では、キリスト教、イスラム教に圧迫されて仏教が衰えたという記述があり、インドにおいて仏教が衰微しているという情報は確実に日本にもたらされていた。これを承けて、白石の『采覧異言』に大幅な加筆訂正を行った山村才助の『訂正増訳采覧異言』（享和二年）では、「彼浮屠氏ノ國ノ如キハ古ヘハ厄勒祭亞ニ破ラレテ帝王擒トナリ、今ハ莫臥兒ニ併セラレテ回々教ノ國トナル者、豈我カ萬古不易神靈傳統ノ帝國（日本）ト同日ノ談ナラシヤ。」（巻十）と、日本との対比においてインドの国力の弱さが述べられ、山片蟠桃の『夢の代』（文政三年）では、「佛法天竺ニ始リテ、コレヲ用ユルハ南天竺ノミ。ソノ他ハミナモール宗トナル。」、「本源ノ天竺ニ近國ハ衰微ナルヨシ。」（巻九）など、排仏論の文脈の中でインドでの仏教の衰微が語られていて、十九世紀の知識人の世界では、共有された知識となっていた。

平田篤胤の講義を編輯した『出定笑語』（文化八年）では、玄奘の『大唐西域記』のほか、同時代の世界地理書『訂正増訳采覧異言』および森島中良の『紅毛雑話』（天明七年）を引用してインドの地誌的紹介を行っている。『出定笑語』での篤胤のインド理解には、正確な情報に混じって、ヨーロッパ人の誤解をそのまま受容して釈迦の生地をスリランカに比定し、ま

た、仏教の衰微を語る際に、東南アジアをインド世界に含める当時の東西に共有する地域概念を前提とした「釋迦ガ出生シタル、カビラエ國ハ、トクニ、ソノ子孫モ、ミナ亡ビテ、今ハカノ崑崙ボノ國ト共ニ、阿蘭陀ニ、セシメラレテ佛法モ大半亡ビテ、切支丹宗ニ成テ」と、インド人と蘭領東インドのマレー人を混同する錯誤なども見られる。こうした種々の海外情報から、総括としてインドの風俗を「スベテ下國ノ風俗デ」（巻上）であると断定するインドおよび仏教の価値を貶める講説を行っている。篤胤の戦略は、仏教の祖地としてのインドに対して一般の聴衆が持っていた漠然とした崇敬の感情を、同時代のインドの実像を伝えることで突き崩すことであつたと考えられる。この偶像破壊に対しインドに関する海外情報は有効な材料を提供するものであつた。それは、インド認識の深まりが、インド蔑視と仏教の排除に結びつくという皮肉な関係であつた。

淵岡山より見た藤樹の思想「良知・孝」

鈴木 保 實

藤樹（一六〇八一―一六四八）の高弟に熊澤蕃山（一六一九―一六九二）と淵岡山（一六一七―一六八六）がいる。その一人淵岡山は正保元年（一六四四）二十八歳の時、藤樹（三十七歳）に入門し、その死まで師事した。藤樹の没後、京都に出て師説を広めた。岡山は藤樹の思想「良知・孝」についてどの様

第13部会

に解釈したのか、岡山の解釈を見てみたい。

一 藤樹三十七歳の頃の良知・孝

― 同体異名―永遠なる生命―

岡山が藤樹に入門した頃、孝・良知について藤樹はどのような思索状態にあったのか。

藤樹の思索を概観してみると、三十二歳の頃より、平旦の気を養うべく毎朝孝經を拝誦し始め、三十三歳の頃には『孝經大全』所収の『全孝図』（虞淳熙）『全孝心法』（虞淳熙）『誦經威儀』（作者不明）等の解釈に接し、広大無辺なる孝の解釈を持ち始めて『翁問答』を著し、又、『性理會通』所収唐樞（一四九七―一五七四）の『禮元剩語』を読み、毎月一日齋戒して太乙神を祭るようになる。冬には王龍溪語録を得て「始コレヲ読ムトキ其觸発スルコトノ多キコトヲ悦ブ。然レドモ其佛語ヲ問雜シ禅学ニ近キコトヲ恐ル。後、陽明全集ヲ得テコレヲ読ムニ至テ、龍溪ノ禅学ニ近カラザルヲ知ル。……聖人一貫ノ学本太虚ヲ以テ準則トス。老仏ノ学皆一貫ノ中ヲ離レズ。精粗大小アルノミ。……皆太虚一貫ノ道ヲ悟ラシメンコトヲ欲スルモノナリ。」と岡田氏本年譜三十三歳の条にあるが如くなる。又、三十四歳には「勢州大神宮ニ参詣」し、三十六・七歳の頃『鑑草』を著し、「明德仏性」を同体異名とする解に至っている。この『鑑草』執筆の頃から『陽明全集』を得た三十七歳秋頃までに孝と良知が結びつく。岡田氏本年譜藤樹三十七歳の条に、「是年始テ陽明全集ヲ求得タリ。コレヲ読デ甚ダ觸発印証スルコトノ多キコトヲ悦ブ。其学彌々進ム。」とある。陽明全集を得て藤樹は良知の解が定まったのである。また孝と太乙神とを

同体異名とするが、それは三十九歳夫人高橋氏の死の頃までには熟していた。岡山が入門した頃、藤樹は毎朝孝經拝誦を実施し、月一回太乙神を祭っていた。岡山はこれらの実践に参加し、又、夫人高橋氏の死により太乙神の祭りを取りやめたことも理解していたと思われる。

二 岡山の解した良知・孝

柴田甚五郎氏は昭和十八年に「淵岡山は神道と孝道とを良知に帰一し、良知の実現を以て神道と孝道の精神が実現出来るとした。」と言われる。柴田説は岡山が「神の信念」「孝道」「良知思想」ともにより宗教的道徳的に実現し、実行的に教説し、藤樹よりも一歩進めたとされる。木村光徳氏は昭和五十二年に「藤樹の翁問答の儒仏論は中年未定の説であつて、この未定の説は晩年の『鑑草』『春風』によつて止揚されているのである。藤樹を忠実に継承する篤実な岡山が、何故に藤樹中年未定の説に留るのであろうか。……岡山は師の『鑑草』著作の意味を十分には理解し得なかつたもの、と思われる。」と言われ、六十年にも「……道教思想は忠実に継承しながら、仏教の継承は不十分であつた。むしろ師説を否定している。」と言われる。又、木村説では岡山が「孝」解釈を篠原氏本により、「身ヲ立道ヲ行名ヲ後世ニ揚テ父母ヲアラハスヲ孝道ノ至極至徳要道ト説玉ヘリ」として岡田氏本によつていない点を指摘しておられるが、これは正鵠を得ているように思われる。

岡山は孝説においては師説に至らず、末節においても齟齬する所があるが、「何れの道にて成も、此凡情を脱し天理に合かなへ候へば本望と帰着に仕候」、「神道仏道今時の儒者……是等は皆

聖教の域に不合といふ事あるべからず。」「鑑草、翁問答、春風の類、御読被成候はば、俗心除可申候。」「三教共明德を明にする教なれ共」等から、藤樹思想の根幹（良知・孝）の理解と学ぶ方法論は大筋踏襲し、より宗教的になったように思われる。

神道思想における生命主義的救済観

鈴木 一彦

対馬路人・西山茂・島蘭進・白水寛子の「新宗教における生命主義的救済観」（一九七九）で研究課題として提示された「日本の宗教伝統との比較」について、大祓詞や中臣祓の註釈書などに窺える祓の思想に焦点を当て、神道と金光教を事例として取り上げ、日本の宗教伝統と新宗教の両者が有する生命主義的要素と救済観との関わりについて究明を試みた。そして、金光大神の信仰形成上、重要な役割の一端を果たしていた六根清浄祓や大祓詞といった祓詞は、呪術的宗教性に裏打ちされた祓の思想に基づく詞であることから、近代化を促した大衆的倫理革新をひきだす力となった新宗教の呪術的宗教性の一つに、この祓詞との関わりから生じる信仰があるのではないかとの推測のもと考察を行った。

まず、呪術的宗教性に裏打ちされた祓の思想とはいかなるものであったのかを、律令祭祀における二季恒例の大祓をはじめ

め、伊勢神道や吉田神道における中臣祓の註釈書を中心に窺った。その結果、二季恒例の大祓は、前半の儀と後半の儀に分かれる二重構造となっており、前半の儀で東正文部の読む祓詞は東文忌寸部の横刀を献る時の呪という呪詞であり、後半の儀で中臣の宣る祓詞は大祓詞であった。この二つの儀は、呪術的行為などから生じる災気を祓の対象とすることで、災禍から身を守るという祭儀であった。そして、十一世紀以降、宣読体形式の大祓詞とは別に、奏上体形式の中臣祓を用いた個人祈願が、陰陽師によって担われ、やがて貴族社会から広く庶民一般へと拡大していった。そして、鎌倉中期頃に成立した両部神道書『中臣祓訓解』では、中臣祓は、恒例の大祓のように災気を祓うのみならず、心の清浄や、神仏の恵みや、苦しみからの救済を約束する呪術的な祝詞と解釈されるに至る。また、中臣祓本文を唱えるのとは別に、清浄に関する偈を唱えることで心が清浄になるという、もう一つの儀が、中臣祓本文中に内包されるという二重構造をもつようになる。この二重構造は、『倭姫命世記』などの伊勢神道書や、伊勢流中臣祓の註釈書にも窺える。一方、恒例の大祓は、応仁の乱以降に廃絶するが、その頃、吉田兼俱によって創唱されたのが吉田神道であった。その吉田神道では、中臣祓を十二段に分け、それぞれの段落が、どのような効用をもつかが明確に示されると共に、各段落で完結した祓詞がつくられるに至る。そして、伊勢神道で重んじられた清浄に関する偈も、吉田兼俱がつくったとされる六根清浄祓に「清く潔き偈」として受け継がれていくが、この六根清浄祓には、神の宿る心を清浄に保つことを通じて、天地万物と一に